様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３４４１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００７３８

研究課題名（和文）大学における内容言語統合型学習(CLIL)による国際英語(EIL)教授法の開発

研究課題名（英文）Developing EIL pedagogy for CLIL at the university level

研究代表者
日野　信行（HINO, Nobuyuki）

追手門学院大学・共通教育機構・教授

研究者番号：８０１６５１２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：日本の大学の授業において、英米語の言語的・文化的規範を超えた国際英語のコミュニケーション能力をどのように養成するか、という問題意識に基づき、前回の科研で提案した、内容言語統合型学習 (Content and Language Integrated Learning) (CLIL) をEIL教育に活用する教授法をさらに具体的に発展させた。また、言語モデルや文化的要因等の理論的考察を深化させた。枠組みとしては、従来のEILの概念にELF (English as a Lingua Franca)及びWE (World Englishes) を加えた統合的なEILのパラダイムを用いた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
英米語モデルの教育とは異なる「国際英語」の教育において、従来は具体的な教授法が明らかでなく、国際英語の多様性に対する意識の涵養にとどまる傾向があったが、本研究では、高等教育を対象として、授業における実際の指導方法を開発した点に社会的意義がある。また学術的意義としては、対立図式でとらえられることの多い ELF (English as a Lingua Franca)とWE (World Englishes)の理論をEIL (English as an International Language)の概念において統合することにより、教授法開発における統合的パラダイムの意義を示したことが挙げられる。

研究成果の概要（英文）：This research project developed a pedagogy for teaching EIL (English as an International Language) in higher education. EIL consists of varieties of English that transcends native speaker norms for expressing oneself in international communication. Given the nature of EIL, which requires a holistic pedagogy, CLIL (Content and Language Integrated Learning) was chosen as the pedagogical approach. It was specifically remodeled in this project to meet the needs of EIL. Concrete designs and procedures for this approach were devised and systematically described. Theoretical foundations for the pedagogy were also investigated, including intercultural, translingual, and historical aspects. An integrative and eclectic paradigm of EIL was employed in this project for the sake of practicality, incorporating studies in WE (World Englishes) and ELF (English as a Lingua Franca) into the analysis of EIL.

研究分野：「国際英語」教育

キーワード：EIL　CLIL　ELF　EMI　World Englishes

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

日本では伝統的に「国際英語」(國弘, 1970; 鈴木, 1985)と呼ばれる、母語話者の言語文化的枠組を超えたグローバル英語 (Global Englishes) (e.g. Jenkins, 2015a) の概念は、国際学会 International Association for World Englishes (IAWE) や近年の International Conference of English as a Lingua Franca を中心に発展を遂げ、またその研究成果は、国際学術誌 *World Englishes* や *Journal of English as a Lingua Franca* 、また Routledge や Springer 等の国際学術出版のさまざまな叢書などで発表され、今日、いっそう隆盛の度合を増している。

また最近では、Matsuda (2012)、Alsagoff, McKay, Hu, and Renandya (2012)、Marlina and Giri (2014)、 Bayyurt and Akcan (2015) などの出版物に見られるように、国際英語の教育実践に対する関心も高まっている。しかしながら、それら国際英語の教育に関する研究や実践においても、国際英語の多様性に対する気づき (awareness) や肯定的な言語態度 (language attitude) の涵養に重点が置かれる傾向があり、国際英語の実際の能力を養成するための教授法の開発はまだ少ない現状である。

上記のような本研究の学術的背景のもと、本研究課題における大きな学術的「問い」は、「日本の大学の授業において、従来の英米語の枠を超えた国際英語の４技能や相互行為能力などのコミュニケーション能力を、具体的にどのような教授法によって養成するか」であった。

本研究代表者が 2015 年度～2017 年度に実施した基盤研究(C) 「大学での英語による専門授業(EMI)における国際英語(ELF)の学びの方法論」において、大学での専門科目を英語で教える EMI 授業における国際英語の学びの方法論を研究したが、その過程において、広く EMI を対象とするよりも CLIL に特に焦点を当てるほうが効果的であることが浮き彫りになり、本研究においては国際英語のための CLIL をテーマとした。

母語話者モデルに依拠しない国際英語の教育のアプローチとして CLIL が有効であることは、ELF 論の立場からは Dalton-Puffer and Smit (2013, 2016) 、また CLIL 研究の側からは和泉 (2016)（外国語教育メディア学会での講演）などによって示唆されてきた。しかしながら、国際英語に特に焦点を当てた CLIL の教授法を体系的に提示するには至っていない。

本研究代表者は、Cambridge University Press の学術書の章として執筆した Hino (2016) 等において、CLIL による ELF の学びのアプローチとしての CELFIL (Content and English as a Lingua Franca Integrated Learning)という概念を提唱し、CLIL による「国際英語」教授法の意義に関する議論を提示した。この CELFIL のアプローチに基づく Design と Procedure を開発することが、次なる課題であった。

２．研究の目的

本研究は、本研究代表者による上述の前回の科研の成果を引き継いたうえで、新たな視点からさらに発展させる。本研究の目的は、母語話者の言語的・文化的枠組を超えた英語である「国際英語」(EIL) (Smith, 1976, 1981; Hino, 1988, 2017a, b) の教授法を開発し、その Approach・Design・Procedure (Richards and Rodgers, 1982, 2014) を明らかにすることである。主たる対象は日本の大学の授業とし、主なアプローチとしては内容言語統合型学習 (Content and Language Integrated Learning, CLIL) (Coyle, Hood, and Marsh, 2010; 渡部・池田・和泉, 2011; 笹島, 2011) の視点に立つ。

本研究の学術的独自性と創造性は、下記の４点により説明される。

まず第１点であるが、英米語モデルの教育とは異なる国際英語の教育について、従来は具体的な教授法が明らかでなく、国際英語の多様性に対する意識の涵養にとどまる傾向があったが、本研究では、教室における実際の指導方法を開発するものである。グローバル化に対応した英語教育が急務とされる今日、大きな社会的貢献となりうる研究であると考えた。

第２点としては、これまで複数の学派に分かれてそれぞれ独自に発展する傾向のあった国際英語論のパラダイム（Hino, 2001, 2009, 2017a）を統合し、教授法開発という実際的な目的に応用することである。具体的には、国際コミュニケーションのための英語に関する Smith (1976, 1978, 1981) の古典的な EIL (English as an International Language) 論を基礎として、英語変種の社会言語学的分析を主眼とする Kachru (1976, 1985, 1986, 1997) の WE (World Englishes) 論の知見を取り入れるともに、国際英語の流動性とダイナミズムを重視する Jenkins (2000, 2007, 2014, 2015b)、Seidlhofer (2011)、Mauranen (2012) 等の近年の ELF (English as a Lingua Franca) 論、そして長い歴史を有するわが国在来の国際英語論 (斎藤, 1928; 國弘, 1970; 鈴木, 1971) 、などを発展的に統合した新たなる EIL のパラダイムである。この新しい国際英語論の体系は、*EIL Education for the Expanding Circle: A Japanese Model* として国際学術出版社 Routledge (London)より 2018 年に出版した本研究代表者の単著の中心的な内容を成す部分であったが、本研究における教授法開発は、当該のパラダイムの最初の本格的な応用例であるとともに、国際英語論のパラダイムの統合のあるべき形態を検証する役割を担うものであった。

第３点は、Reflective Practice (Richards and Lockhart, 1994; Richards and Farrell, 2015) の手法を教授法開発に応用するという点である。省察に基づく実践の積み重ねにより教授法を構築していくこの方法は、元来は教員の個人レベルにおける授業方法の改善に役立てるものであったが、実際の授業の状況における実践を通じて教授法を開発することで、本来の教育の理念に沿った営みとなるという利点を有している。本研究代表者は、Jack C. Richards 教授の一連の Reflective Practice 研究の端緒となった論文 Richards and Hino (1983) の共同研究者としてセカンドオーサーをつとめて以来、この視点について考察してきたが、本研究はこの立場を最新の形で実施するものである。また、このような角度からの Reflective Practice の可能性の探求は、現在の大学英語教育学会 (JACET) が本格的に取り組んでいる「授業学」（e.g. 大学英語教育学会授業学研究委員会, 2007）の理念にも沿うものであり、今日的な意義を有する。

第４点として、本研究は「国際英語」教育のための CLIL の可能性を拓くという側面を有する。国際英語と CLIL の親和性については本研究代表者は Hino (2010) 等で論じ、また上記のように Dalton-Puffer and Smit (2016) や和泉 (2016) にも示唆があるが、国際英語と CLIL の関係については依然として明確でない部分が多い。大学の国際化に呼応して専門科目を英語で教える EMI 授業が日本をはじめ世界的に増加する中で CLIL が注目される今日において、本研究を通じて「国際英語」教育における CLIL に関する知見を得ることは、学術的にもまた社会貢献の上でも大きな意義を有すると考えた。

３．研究の方法

具体的な研究方法は、「授業学」としての Reflective Practice (Richards and Lockhart, 1994; Richards and Farrell, 2006) の応用であり、実際の授業における実践、それに対する省察、そして授業方法の改善、というサイクルを繰り返す中で、教授法を構築するというものである。

今回の主な考察対象とした授業は、本研究代表者（日野）が 2022 年度まで勤務した大学の大学院における本研究代表者の言語文化教育論（その後は第二言語教育実践研究）のクラスであった。EMI における CLIL を目指す授業であり、内容の学びとともに、国際英語の学習としての効果をもたらすことを目的とする授業であった。また、本研究代表者が 2022 年度まで勤務した大学の共通教育における本研究代表者の英語授業も CLIL と理念を大幅に共有する Content-Based Instruction (CBI) によって国際英語を教えるクラスであり、考察の対象に含めた。また、2023 年度から研究代表者が勤務している大学の共通教育における総合英語の授業も国際英語の理念を基盤とする CLIL のクラスであり、これも考察の対象とした。さらに、研究協力者のうち小田の勤務する大学学部における演習授業も考察の対象とした。

省察のプロセスにおいては、授業録画、アンケート、インタビュー、ディスカッション、ジャーナル、観察など、多角的な質的手法を用いた。

この他、当初は、他の教員による CLIL 授業の見学による観察も大幅に実施する予定であったが、それを本格化しようとした矢先に新型コロナウィルス感染症の拡大によって授業見学が困難となり、結局、他の教員の CLIL 授業の見学は、残念ながら本研究においてはきわめて限定的な規模にとどまることとなった。

しかしながら、コロナ禍の予期せぬ副産物として、国際英語の CLIL において、対面だけでなくオンラインに対応した教授法も実践・検証することができたのは、非常に有意義であった。

留意すべき重要点は、EMI/CLIL クラスの参加者の多様性である。本研究代表者のクラスはコロナ禍以前は外国人留学生と日本人学生が共に受講する典型的な EMI 授業であったが、コロナ禍における授業では受講者の大半が日本人学生であった。実際、教育現場においては、EMI/CLIL この両方のケースとも従来から多く、両方のパターンに対応する EMI/CLIL 教授法を開発する必要がある。ここにおいて、先に述べた国際英語のパラダイムの統合は特に意義を持つ。前者のような事例は WE 論だけでは対応が難しく、逆に後者のような事例には ELF 論での分析はあまり適していない。統合したパラダイムとしての新しい EIL 論が力を発揮する状況である。

４．研究成果

コロナ禍においてフィールドワークが大きく制限されることとなったが、一方ではその分のリソースを文献研究に割くとともに内省の機会を増やすことができた。結果として、本研究課題の実践的側面だけでなく、理論的基盤の考察において成果を上げることができた。国際英語の指導のための Japanese English のモデル、特に音声・音韻的側面の検討、日本の大学生に適した「国際英語」教育のアプローチ、「国際英語」教授法の文化的側面等である。

以下、年度に従って研究成果を記述する。

まず初年度の 2018 年度であるが、日本の大学の授業における国際英語 (EIL) のための内容言語統合型学習（CLIL）に関して、観察・省察・実践等を通じてここまでに開発した方法論を、教授法分析の古典的枠組みである Approach・Method・Technique (Anthony, 1963) によって描出した。またそのためのカリキュラムや大学運営上の要因等について体系的に論じ、EIL (あるいは ELF) のための CLIL 実施の環境整備に関して考察した。その成果は、Designing CELFIL (Content and ELF integrated learning) for EMI classes in higher education in Japan という

タイトルで、世界的に強い影響力を有する国際学術出版社 Routledge の書籍 *English-medium instruction from an English as a lingua franca perspective* (Ed. by K. Murata) の章として発表した (Hino, 2019)。また、EIL の理論的基盤に関して分析した An EIL pioneer far ahead of his time という論文を、この分野で世界的に最も高い権威を有する国際学術誌 *World Englishes* (Wiley)に発表した (Hino, 2018)。さらに、「国際英語」研究の国際学会の最高位に位置する International Association for World Englshes (IAWE)の年次大会 (於 Ateneo de Manila University, フィリピン) で基調講演 (Hino, 2018)をつとめたことをはじめとして、PAAL (Pan-Pacific Association of Applied Linguistics)年次大会での基調講演 (Hino, 2018)、Asia TEFL 年次大会 (於 University of Macau, マカオ)での Featured speaker (Hino, 2018)など、EIL のための CLIL に関する内容を含む招待講演を権威ある国際学会においてつとめた。

2019 年度は、本研究の理論的側面の考察として、国際学術出版社 Palgrave Macmillan から出版された *English as a Lingua Franca in Japan* (Ed.by M. Konakahara and K. Tsuchiya)という書籍に、日本の社会的・文化的環境に適合する「国際英語」教授法のあり方について、ELF education for the Japanese context と題する章を発表した (Hino, 2020)。また、国際学会 International Association for World Englishes の年次大会において、日本のように独自の英語モデルが確立していない国での「国際英語」教育のモデルに関して、Struggling with the peripherality of the Expanding Circle toward equality と題する発表を行った (Hino and Oda, 2019)。

2020 年度は、国際学術出版社 Springer の書籍 *Functional Variations in English* (Ed. by R. A. Giri, A. Sharma and J. D'Angelo)に、本研究で開発した内容国際英語統合教授法 CELFIL (Content and English as a Lingua Franca Integrated Learning)を Approach・Design・Procedure (Richards and Rodgers, 1982, 2014)の枠組みを用いて提示した論文 CLIL pedagogy for EIL in higher education を出版した (Hino and Oda, 2020)。本論文はこの時点までの本研究の成果の中核的部分を公刊するものである。

また、国際学術誌 *Asian Englishes* (Routledge)からの招待執筆により、上記の「国際英語」教授法における学習者のモデルとなる英語のあり方に関して、論文 Japanese English as an Expanding Circle variety を出版した (Hino, 2021)。さらに、国際学会 QS Subject Focus Summit on Modern Languages and Linguistics (オンライン）で基調講演 Language education from a post-native-speakerist perspective を行い、上記の CELFIL やその理論的基盤について講演した (Hino, 2020)。また、国際学会 The 55th RELC International Conference（シンガポール、オンライン）での招待講演においては国際英語教授法のための理論的パラダイムの統合について新たな視点を提示し (Hino, 2021)、また同学会の招待パネルにおいては国際英語教授法の文化的側面について論じた (Hino, 2021)。

2021 年度は、前述の QS Subject Focus Summit 2020（世界大学ランキングで知られる QS の主催による国際学会）で本研究代表者が行った基調講演を改訂して国際学術誌 *Russian Journal of Linguistics* に論文 Hino (2021)として出版し、その中で、本研究において開発した「内容国際英語統合教授法」(CELFIL) (Content and English as a Lingua Franca Integrated Learning)の理論的基盤と教育実践について論じた。国際英語(EIL/ELF)の言語的・文化的多様性や、国際英語のダイナミックな流動性に適応するためのコミュニケーション方略などを、CLIL によって学ぶアプローチである。また、コロナ状況に対応したオンライン教育での CELFIL のあり方についても本論文で考察した。また、TELLSI Conference（イラン英語英文学教育学会国際大会）（テヘラン、オンライン）での基調講演など、本研究代表者による国際学会 1 件（オンライン）、国内学会 5 件（オンライン 4 件、ハイブリッド 1 件）の招待講演においても本研究の成果を発表した。それらの講演においては、理論面では CELFIL に至る歴史的経緯、実践面では CELFIL における音声指導のモデルの問題などをはじめとして、理論と実践のさまざまな側面について論じた。また、大阪大学の『言語文化共同研究プロジェクト』シリーズに発表した日野による 2 本の論考では、それぞれ、教育効果の向上を目指して国際英語の複数の理論的パラダイムを統合するための方法論、及びステレオタイプを回避しながら異文化理解の指導を行う教授法という、本研究における重要課題のうちの 2 件についての考察を展開した。

2022 年度は、コロナ禍において CLIL による国際英語 (EIL) 教授法の研究に関して実践面に加え理論面の考察にも力点を置いてきた成果を発表した。学会誌論文 1 編、国際シンポジウム招待講演 1 件、海外研究会招待講演 1 件、国際学会大会発表 1 件により、理論及び実践の両面にわたる発表を行った。具体的には下記の通りである。学会誌『日本英語教育史研究』における論文では、本研究代表者は、「国際英語」教授法への日本的なアプローチにおける歴史的・文化的要因について考察した。また、Ee-Ling Low 教授や Ruanni Tupas 教授をはじめとする「国際英語」研究の世界的権威がオンラインで結集した東京外国語大学における国際シンポジウムでは、本研究代表者は、招待講演者として、日本に代表される Expanding Circle（拡大円）諸国での「国際英語」教授法における独自の英語モデルの意義について論じた。さらに、コロナによる海外渡航制限が緩和された後まもなく対面で行ったハワイ大学マノア校の第二言語研究会

での本研究代表者の招待講演では、Global Englishes (GE)の概念をキーワードとして、「国際英語」教授法のパラダイムや文化的側面等とともに、国際英語の CLIL における具体的な授業実践について論じた。そして、台湾の大学をホストとしてオンラインで開催された、本研究分野で世界的に大きな影響を有する国際 ELF 学会では、本研究代表者及び研究協力者（小田）の共同発表として、CLIL による「国際英語」教授法における発音教育について、Jenkins (2000)の Lingua Franca Core (LFC)を再評価するにあたり、「脱二項対立」及び「相対化」によって発音のモデル構築に資することを提案した。

最終年度である 2023 年度には、本研究での理論的考察の成果として、6 月にニューヨーク州立大学ストーニーブルック校（米国）での International Association for World Englishes (IAWE)大会において、国際英語の教授法の言語文化的な要因に関する発表 (Hino and Oda, 2023)を行った。3 月には、RELC International Conference（シンガポール）において招待講演 (Hino, 2024)をつとめ、日本での国際英語の教育実践からの EIL 教授法への示唆について論じた。さらに、バンコク（タイ）でのチュラロンコン大学・タイ教育省共催の Post-RELC セミナーでも招待講演 (Hino, 2024)をつとめた。また、本研究の最終的な総括としての性格を持つ原稿として、大学での CLIL による「国際英語」教授法 (CELFIL, Content and ELF Integrated Learning) の原理を抽出して論じる原稿を、国際学術出版社 Routledge から出版される予定の書籍 *English Medium Instruction Pedagogy in Disciplinary Classrooms* (Ed. by R.Yuan and X. Qiu, forthcoming)の章として執筆し(Hino, forthcoming)、査読を経て採択され、2024 年 6 月現在、出版準備中である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 日野信行	４．巻 37
２．論文標題 「国際英語」教育の研究における歴史的考察の意義	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本英語教育史研究	６．最初と最後の頁 37～60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 HINO Nobuyuki	４．巻 25
２．論文標題 Language education from a post-native-speakerist perspective: The case of English as an international language	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Russian Journal of Linguistics	６．最初と最後の頁 528～545
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.22363/2687-0088-2021-25-2-528-545	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 HINO Nobuyuki	４．巻 24
２．論文標題 English as a Lingua Franca from an applied linguistics perspective: In the context of Japan	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Russian Journal of Linguistics	６．最初と最後の頁 633～648
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.22363/2687-0088-2020-24-3-633-648	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 HINO Nobuyuki	４．巻 23
２．論文標題 Japanese English as an Expanding Circle variety: Viewpoints and approaches	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Asian Englishes	６．最初と最後の頁 3～14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/13488678.2020.1858582	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 HINO Nobuyuki	４．巻 37
２．論文標題 An EIL pioneer far ahead of his time	５．発行年 2018年
３．雑誌名 World Engishes	６．最初と最後の頁 484～491
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/weng.12336	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計21件（うち招待講演　17件／うち国際学会　16件）

１．発表者名 HINO Nobuyuki; ODA Setsuko
２．発表標題 The historical and cultural background of EIL philosophy in Japan
３．学会等名 The 25th conference of the International Association for World Englishes, Stony Brook University, New York, U.S.A.（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 HINO Nobuyuki
２．発表標題 Pedagogical insights from Japan’s experience in teaching EIL: Challenges and hopes
３．学会等名 The 58th RELC International Conference, SEAMEO RELC, Singapore（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2024年

１．発表者名 HINO Nobuyuki
２．発表標題 Toward the legitimacy of Expanding Circle Englishes: The case of Japanese English
３．学会等名 Summer Course on Asian Englishes, Tokyo University of Foreign Studies (online)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 HINO Nobuyuki
２．発表標題 Teaching EIL, WE, or ELF: Historical context and current issues of Global Englishes
３．学会等名 Thursday “Brown Bag” Lecture Series, Department of Second Language Studies, University of Hawaii at Manoa, U.S.A.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 HINO Nobuyuki; ODA Setsuko
２．発表標題 Revisiting the "ELF1" phase for teaching English in Japan
３．学会等名 13th International Conference of English as a Lingua Franca, National Cheng Kung University, Taiwan (online)（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 日野信行
２．発表標題 「国際英語」教育の研究における歴史的考察の意義
３．学会等名 日本英語教育史学会第37回全国大会（オンライン）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 HINO Nobuyuki
２．発表標題 Going beyond paradigms and chronology in teaching English for global communication
３．学会等名 Forum of the Institute for Research in Humanities and Social Sciences, Aichi University (online)（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 HINO Nobuyuki
２．発表標題 Teaching EIL: Beyond native speaker norms
３．学会等名 1st Chubu Chapter Conference, Practical English Phonetic Society of Japan (online and in-person)（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 日野信行
２．発表標題 国際コミュニケーションにおける自己表現のための Japanese English
３．学会等名 グローバル・ビジネスコミュニケーション協会第17回研究会（オンライン）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 日野信行
２．発表標題 「国際英語」教育の歴史的経緯と基本的課題
３．学会等名 大学英語教育学会2021年度関西支部大会（オンライン）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 HINO Nobuyuki
２．発表標題 Teaching EIL in the Expanding Circle: Sharing the experience of Japan
３．学会等名 18th International TELLSI (Teaching English Language and Literature Society of Iran) Conference, Tehran, Iran (online)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 HINO Nobuyuki
２．発表標題 Language education from a post-native-speakerist perspective: The case of English as an international language
３．学会等名 QS Subject Focus Summit on Modern Languages and Linguistics (online)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 HINO Nobuyuki
２．発表標題 A fundamental dilemma for EIL teachers
３．学会等名 The 55th RELC International Conference, SEAMEO RELC, Singapore (online)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 HINO Nobuyuki
２．発表標題 Integrating EIL, WE, and ELF paradigms in teaching English for global communication
３．学会等名 The 55th RELC International Conference, SEAMEO RELC, Singapore (online)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 HINO Nobuyuki; ODA Setsuko
２．発表標題 Struggling with the peripherality of the Expanding Circle toward equality
３．学会等名 The 24th conference of the International Association for World Englishes, University of Limerick, Ireland（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 HINO Nobuyuki
２．発表標題 Teaching World Englishes for multicultural symbiosis
３．学会等名 The 23rd conference of the International Association for World Englishes, Ateneo de Manila University, Quezon City, Philippines（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 HINO Nobuyuki
２．発表標題 Teaching EIL from a post-native-speakerist perspective in an Asian context: 35 years of practice in Japan
３．学会等名 The 16th Asia TEFL International Conference, University of Macau（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 HINO Nobuyuki; ODA Setsuko
２．発表標題 Appropriate methodology for teaching ELF: From actual examples
３．学会等名 The 11th International Conference of English as a Lingua Franca, King’s College London, UK（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 HINO Nobuyuki
２．発表標題 EIL education for the Asian Expanding Circle
３．学会等名 The 23rd conference of the Pan-Pacific Association of Applied Linguistics, Juntendo University（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 HINO Nobuyuki
２．発表標題 Prospects for the development and diffusion of original Englishes in the Expanding Circle
３．学会等名 The 23rd conference of the Pan-Pacific Association of Applied Linguistics, Juntendo University（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 HINO Nobuyuki
２．発表標題 Liberating language users from native speaker norms
３．学会等名 The 12th International Symposium on Japanese Language Education and Japanese Studies, Hong Kong Polytechnic University（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計11件

１．著者名 Hino Nobuyuki	４．発行年 2023年
２．出版社 大阪大学大学院人文学研究科	５．総ページ数 45
３．書名 「言語・文化・教育：実践と研究から」『英語教育の新たなる実践に向けて（2)』（言語文化共同研究プロジェクト2022）(pp.1-14)	

１．著者名 Hino Nobuyuki	４．発行年 2021年
２．出版社 大阪大学大学院言語文化研究科	５．総ページ数 36
３．書名 Toward an orderly paradigmatic integration in language education: Applying psychotherapy integration to global Englishes.『英語教育におけるグローバリゼーション 』(言語文化共同研究プロジェクト2020) (pp.1-8)	

1．著者名 Hino Nobuyuki	4．発行年 2022年
2．出版社 大阪大学大学院言語文化研究科	5．総ページ数 38
3．書名 Acknowledging cultural differences without cultural stereotyping: A challenge for EIL teachers. 『英語教育の新たなる実践に向けて』(言語文化共同研究プロジェクト2021) (pp.1-8)	

1．著者名 日野信行	4．発行年 2020年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 208
3．書名 「言語使用者を母語話者の規範から解放する言語教育：国際英語と国際日本語」青山玲二郎・明石智子・李楚成(編) 梁安玉(監) 『リンガフランカとしての日本語：多言語・多文化共生のために日本語教育を再考する』(pp.149-169)	

1．著者名 Hino Nobuyuki	4．発行年 2020年
2．出版社 大阪大学大学院言語文化研究科	5．総ページ数 38
3．書名 The recurring lives of language pedagogy. 『新しい時代の英語教育』（言語文化共同研究プロジェクト2019) (pp.1-9)	

1．著者名 Hino Nobuyuki; Oda Setsuko	4．発行年 2020年
2．出版社 Springer	5．総ページ数 340
3．書名 CLIL pedagogy for EIL in higher education. In R. A. Giri, A. Sharma & J. D'Angelo (Eds.) Functional variations in English: Theoretical considerations and practical challenges (pp.295-309)	

1．著者名 Hino, Nobuyuki	4．発行年 2019年
2．出版社 大阪大学大学院言語文化研究科	5．総ページ数 30
3．書名 The significance of paradigmatic eclecticism in teaching English for global communication. 『新しい視点からの英語教育』(言語文化共同研究プロジェクト2018) (pp.1-10)	

1．著者名 Hino, Nobuyuki	4．発行年 2020年
2．出版社 Palgrave Macmillan	5．総ページ数 358
3．書名 ELF education for the Japanese context. In M. Konakahara & K. Tsuchiya (Eds.) English as a lingua franca in Japan: Towards multilingual practices (pp.27-45)	

1．著者名 Hino, Nobuyuki	4．発行年 2018年
2．出版社 大阪大学大学院言語文化研究科	5．総ページ数 41
3．書名 World Englishes education: Toward multicultural symbiosis.『新しい英語教育のアプローチ』（言語文化共同研究プロジェクト2017）(pp.1-14)	

1．著者名 日野信行	4．発行年 2018年
2．出版社 桐原書店	5．総ページ数 201
3．書名 「母語話者英語と非母語話者英語：非母語話者英語の正当性を主張する論理」「ニホン英語の論理」本名信行・竹下裕子（編）『世界の英語・私の英語：多文化共生社会をめざして』(pp.16-26, pp.123-132)	

１．著者名 Hino, Nobuyuki	４．発行年 2019年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 289
３．書名 Designing CELFIL (content and ELF integrated learning) for EMI classes in higher education in Japan. In K. Murata (Ed.) English-medium instruction from an English as a lingua franca perspective: Exploring the higher education context (pp.219-238)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	小田　節子 (ODA Setsuko)		
研究協力者	リチャーズ　ジャック (RICHARDS Jack C.)		
研究協力者	カークパトリック　アンディ (KIRKPATRICK Andy)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関